

# ことばをとおして考える力を育むための視聴覚機材の活用についての研究 ～学びあう国語教室～

村山市立大久保小学校 鈴木 宏平

## 1 テーマの設定

教科指導の効果を高めるための視聴覚機材を考えたとき、PCやデジタルカメラ等の利用が考えられる。学習指導要領解説の総則編によると、教科の「指導の効果を高める観点から利用」すること、また、「表現活動や知的活動のための道具」「人と人とを結ぶ道具」として活用することを通して「新たな学び」を生み出していくことが求められている。つまり、本研究の視点として大切なのは、PC等の活用技術そのものではなく、教育のあり方（教科の力をつけるための授業、教育観）である。

さて、近年の情報化の急激な進展にともない、文部科学大臣の諮問を受けた文化審議会の答申（H16年2月）では、今後の情報化と国語科のかかわりについて提言している。答申では「膨大な情報を速やかに処理・判断する能力」や「必要な情報と必要でない情報を選択する能力」「多くの必要な情報の中から本質をつかみとる能力」「限られた時間の中での的確に文章をまとめて自らの情報を発信する能力」などが、これからの国語科の役割の一つになっていくであろうと提言されている。これらの能力は、OECDによるPISA調査で知られる「読解力」の定義と共通する点がある。つまり「テキストの中の情報の取り出し」→「解釈」→「熟考」そして「活用」といった能力である。さらに、これらは文部科学省の定義する「情報活用能力」とも関連する。このように、今後の国語科を鑑みると、PISA調査の「読解力」の育成を含んだ「情報活用能力」の育成が課題の一つとなると考えられるのである。

国語科で情報活用能力を育てるとき、「ことばをとおして考えること」と「視聴覚機器の活用と表現力」の2つの視点が必要になる。また、視聴覚機器の中でも特にPCの活用による「学習の閉鎖性」の問題（佐藤学氏『カリキュラムの批評』）について留意する必要がある。

## 2 研究の仮説

### （1）情報活用能力とことばと思考のかかわり

視聴覚機材を用いた情報活用の場において、こ

とばの力や思考力を明らかにすることで、言語能力を高めるとともに、情報活用能力を育成していくことができるだろう。

### （2）視聴覚機材の活用と表現と思考のかかわり

視聴覚機材を学習（表現）の道具として利用し、協同的な学習の過程を大切にすることで、一人一人の表現力（「書くこと」）を高めることができるだろう。

## 3 研究の方法

### （1）仮説1にかかわる実践計画

情報活用能力を育むための言語活動の視点を、以下の3つの側面でもとらえ指導にいかす。

情意的側面	認知的側面	技術的側面
・文献利用の態度 ・計画性、目的意識、相手意識 ・言葉への関心 探究心 表現意欲 著者意識 ・共感できる心と言葉 ・他者とのかかわり etc.	・資料の信用性、 真実性、適合性、 価値の判断 ・論理力（列挙、 比較、類別、関連 付け、定義づけ、 類推、原因・結果、 結論付け） ・クリティカルリ テラシー etc.	・コンピュータリ テラシー ・速読力、意図を 探る力、要約する 力、要旨をつかむ 力、事実と意見の 区別 ・文章構成力、文 章引用力 etc.

### （2）仮説2にかかわる実践計画

自分なりの問いの探究のために、PC等の視聴覚機材を利用し、一人一人の熟考する時間と表現の多様性を大切にする。その際、PC活用における問題点である閉鎖性を克服するために、他者との生のコミュニケーションを重視したい。考えられる手立てとして、「学習の主題の共有」「協同プランニング」「協同作業」などがある。

## 4 研究の実践1（第6学年「読むこと」）

### （1）単元名

「自分の考えを伝えよう～新聞・意見文づくり～」  
主教材『平和のとりでを築く』（光村6年）

### （2）目標

・私たちの未来について“平和”をキーワードとして教材文を進んで読むことができる。また、目的に応じて様々な資料を集め、友だちと協力しな

がら学習する態度を育むことができる。(関心・意欲・態度)

・筆者の主張がどのような事実をもとに表現されているのか、文章構成や文末表現をもとにして、その意図をとらえて読み、筆者の主張について自分はどうか考えるかをまとめることができる。(読むこと)

・様々な資料(デジタルコンテンツ)について、自分の表現の目的や意図に応じてその価値を判断するなど批判的に読み、表現の材料として役立てることができる。(読むこと)

・表現の目的や意図に応じて、友だちと考えを共有しながら文章全体の構成を工夫することができる。(書くこと)

・読み手の立場から文章全体を客観的に読み、効果的な表現となっている部分のよさを確認しあうことができる。(書くこと)

・新聞や意見文の文章構成を理解することができる。(言語事項)

### 3 指導にあたって

#### <仮説にかかわる指導の手立て>

##### (1) インターネットの利用について、基礎基本となる情報活用能力における言語能力(仮説1)

情報活用能力を、国語科をとおして育てる場合、言語能力としていかにとらえるかが重要になる。

そこで、この言語能力を「情意的側面」「認知的側面」「技術的側面」の3つの視点からとらえ(表1)、一人一人の子どもの実態把握教材研究、内容研究、授業計画、実際の授業における指導と評価、そして今後の課題の把握へとつなげていく視点となる。(表1)

情意的側面	認知的側面	技術的側面
・文献利用の態度(モラル)	・資料の信用性、真実性、適合性などの価値判断	・コンピュータリテラシー
・表現への目的	・クリティカルリテラシー	・事実と意見
・他者とのかかわり(協同性)		・文章構成力 ・文章引用力

また、この視点をもとにした実態把握により、「誰に」「何を」「どのように」指導することが大切かということが明確になる。よって、情意的側面について支援を必要とする子ども、認知的側面について支援を必要とする子ども、技術的側面について支援を必要とする子ども、それぞれに合った発問や学習活動を準備することができる。

##### (2) 表現したい内容、目的を明確にした情報収

#### 集・価値判断・表現(仮説1)

目的意識や自分の表現意図を明らかにすることが大切になる。そして、資料の選択・価値判断・活用を通して、比較、類別、分析、判断、推量、他者とコミュニケーションできる力などを育成し、資料を読んだり友だちと話し合ったりして考えたことを自分の表現に生かすようにする。

##### (3) PCの活用(インターネットの利用等)による協同性の実現(仮説2)

PCを学習の道具として活用しながらも子どもたちのコミュニティ形成を、意識的に教師が行う必要がある。その具体的な手立てとして、一人でPCと向き合い作業するだけではなく、表現するうえで悩んだり困ったりしたときには相談できる「協同的なプランニングの時間」を大切にする。

### 4 学習の様子と分析<A児の学びを中心に>

#### (1) 情報収集と価値判断について

本とインターネットの調べ方の違いについて、経験をもとに話し合い、次のようにまとめた。

<本> 本のタイトル、作者、目次 → 内容

<インターネット> 内容 → トップページ、タイトル、作者、サイトマップ(目次)

インターネットを調べる道具として活用するとき、内容をみて瞬時に価値判断せずに、トップページにもどって価値判断することが、資料の信用性、真実性を判断するためにも重要であることを理解した。

A児はインターネットを使った情報収集において、下記のように価値判断を行った。

判断	アドレス	信用性	真実性	新鮮さ	適合性
×	http~	○	○	○	△
○	http~	○	◎	○	○
×	http~	×	○	×	×
○	http~	○	◎	○	○

#### ア 信用性について

これは、このサイトが「信用できるかどうか」を考えるものである。実際に検索を続けていくと、子どもたちの間から、次のような意見が出された。

- ・作者だけではなく、その人や団体の住所、電話番号、Fax番号、Mailの宛先などがのっていると、さらに信頼性が高まること。疑問点は実際に訊ねることができること。
- ・各省庁などの公共機関、出版社のHPなどは信用できること。
- ・2チャンネルや掲示板のようなものは、信用性に欠けること。書き込んだ相手がよくわからないこと。

これらの意見を共有することで、クラス全体の思考が高まった。

A児も、この意見を参考に教科書の出版社のホームページを信用できる情報として受けとめ活用したいと考えた。

## イ 真実性について

これは、このサイトの内容が「本当のことかどうか」を考えるものである。これを判断するために、資料の比較をするように指導した。また、子どもたちから次のような意見が出され、クラス全体で共有することができた。

- ・写真や資料など具体的な根拠、証拠となる事柄をそえて意見が述べられているか。
- ・掲示板などで、自分の考えだけが自由に述べられているものは、本当かどうかはわからないこと。
- ・(①とも関連して) 信用できるサイトか。
- ・(③とも関連して) 新しい事実なのか、古いものなのか確認すること。

A児は探し出した資料が教科書にも使われているような具体的な絵を使って説明している点に注目し、子どもにもわかる絵と言葉であることを確認した。教科書出版社のホームページであることを確認していることが安心感、信頼性を生み、情報の真実性を感じ取っている。

## ウ 新鮮さについて

これは、ホームページがいつ作られたものかを確認し、できるだけ新しいものを選択しようというコンピュータリテラシーの一つととらえている。

A児は、自分に合った情報として2003年のデータは見つけたが、それ以降のものがないかどうか検索していた。結局、いい資料を見つけることができず、今持っている資料でいいかどうか、友だちに相談する姿が見られた。

## エ 適合性について

これは、そのサイトの情報が、自分の表現しようとするテーマを支える資料となるのかどうかを考え、判断するものである。

A児は、『平和のとりでを築く』の読み取りの中で、「作者の願いに対する自分の考えをもつ(作者との対話)」という課題において、次のようにまとめている。

私も「心の中に平和のとりでを築く」ためにも世界遺産を大切にしていきたいと思った。

今、日本にある世界遺産を守るためにも、環境のことなどについて調べ、どう対応していけばいいか、心の中にどんなことをもてばいいのか考えていきたい。

教材を媒介として自分の考えをしっかりともち、自分にとって必要なキーワードを意識し、「環境を守る(環境問題)」というテーマにそって検索し、情報を集めることができるようになった。

## (2) 表現と交流について

これまで述べたような資料の価値判断をもとに、自分のテーマにそって考えたことを新聞に表現した。

PCを使うことによって、自分の表現したいテーマやその意図について、現在進行中の、表現されつつある自分の考えと表現したいものとの比較検討という思考を促すことができる。つまり、ディスプレイに映し出された自分の考えを客観的に見つめながら、いわばもう一人の自分との対話(自己内対話)である。A児は、資料として使う写真の位置や大きさを何度も確かめてはその効果を考えたり、トップ記事の場所やレイアウトを微妙に動かしながら自分の意図が伝わりやすいかどうか考えたりする姿がみられた。

## ア 協同的プランニング

資料をもとにすぐに新聞作りに移るのではなく、どんなことをどんなふうに表現していくかを協同で考える時間をもつようにする。

A児は、自分の集めた資料をB児に紹介し、読み手として

のB児の判断を聞いている。酸性雨が自然や世界遺産にどのように影響を与えることになるかを示すための、酸性雨の発生を表現する図として使うつもりだった。これに対し、B児は

酸性雨がどのように発生するかわかるもので、新聞に合っている。でも、図がわかりにくい。もう少し簡単な言葉にしたり、観点をしばったりしてもいいのではないかとコメントした。A児は、

集めた資料に目的に合ういいものがあつたが、ただ資料をはりつけただけでは難しいから、「絵解き」を入れるようにしたり、ポイントをしばったりしてみたい。

と考えるようになった。協同的プランニングの学習後の感想として、A児は、

自分では気づかないところ(図がわかりにくい)を言ってくれたので、一人でやるよりはいいと思った。

と書き、友だちと交流しながら書くという表現活



動の新しい学習方法のよさを実感することができた。

同じようにB児も、

グループで相談すると、人数も少ないし自分が思ったことを言える。はっきりと言ってくれるのでよかった。

と感想を書いている。少人数によるグループ学習のよさを実感することができた。

## 5 研究の実践2 (第3学年「書くこと」)

(1) 単元名 言葉図鑑をつかって作文を書こう  
～運動会クラス文集づくり～

### (2) 目標

・文集を作る目的に向かって、進んで話し合ったり文章を書いたりすることができる。【関・意・態】  
・写真をもとに様々な性質の言葉を集めて言葉図鑑を作り、それを使って言葉を組み合わせ文を作ることができる。【書くこと(1)ア】

・運動会までの活動と当日の事柄の中で自分が本当に書いて表現したいことを明確にし、様々な事柄の中から書く材料を選択したり書く順序や中心段落を考えて表現したりすることができる。【書くこと(1)イウ、言語事項(1)オ(イ)】

・語句や文・文章構成については、言葉を性質の上から類別したり、5W1Hや主語・述語の関係、修飾・被修飾の関係について考えたりすることができる。また、表記については句読点や改行について考えることができる。【言語事項(1)ウ(イ)エ(ア)オ(ア)】

## 3 指導にあたって

<仮説にかかわる指導の手立て>

(1) 1番書きたいことをもたせる指導【PCを活用したスライドショーをもとにしたフリートーク】と回想力の指導【PCを活用し、写真に言葉を書き込む『言葉辞典』の作成と応用】(仮説1)

運動会までの活動と運動会当日の子どもたちの活躍の様子をデジタルカメラで記録しておき(子どもたちの係活動も含む)、PCとプロジェクターを使ってスライドショーを見ながら振り返ることで、これまでの様子を思い出すことができるようにし、回想力<認知的側面>を育てるようにする。

また、本單元においても写真を見ながらフリートークをすることで、「自分にとって1番書きたいこと」と「感動したことや悔しかったこと」といった誰かに伝えたいような強い思い出をは

きりとさせることができるようにする。大村はま氏はこの「思い出す力」が大切であると述べ、倉沢栄吉氏も「作文においてもっとも大事なものは回想力の修練」であり、「作文の価値は生活を頭の中で再生することにある。『経験の再経験』にある」と述べている。デジタル写真はPCに保存しておくことができ、ウィンドウズXPで簡単にスライドショーを見ることができるので、経験したことを「再経験」する手助けになると考える。

書きたいことをもった段階で、それをどう表現するかが課題となる。本單元では、言葉によって回想する方法の一つとして、思い出の写真をもとに「動詞」や「オノマトペ」、「色彩語」を集める活動を行い、文章を書く前に言葉辞典を作らせる。その言葉辞典をもとに、文の構成を考えさせていく。そして「人物描写」や「場面描写」、「行動描写」を箇条書きできるようにする。さらに、主述の関係や修飾・被修飾の関係を指導していくことで、言語意識の育成を図りたい。

(2) 発想力の指導 【マッピングの活用】(仮説1)

言葉図鑑のスライドショーを見ながら、「自分にとって1番書きたいこと」と「感動したことや悔しかったこと」といった場面を選択し、マッピングし、文章全体の構想を練る。その時、会話文や場面の様子、人物の様子などについても書き加えていくようにする。そして、ラベリング(必要なもの、価値あるものとそうではないものを類別する)する。さらに、ナンバリング(書く順番をつける)を行い、文章作成の準備をさせる。

(3) 協同プランニングと表現の多様性の確保 【グルーピング(仲間とのかかわり)の工夫】(仮説2)

同じ場面を選択した子どもたちが、協同で言葉辞典を作ったり文を箇条書きしたり文章作成したりできるようにグルーピングする。書くのは一人一人ではあるが、構想を練る段階から記述まで、悩んだらいつでも相談したり真似したりできるようにする。書くのは一人一人であるが、常に他者とのコミュニケーションを大切に学習をすすめる。

## 4 学習の様子と分析<C児の学びを中心に>

(1) PC活用(言葉図鑑の作成)と思考の深まり  
ア 言葉図鑑の作成

ペイントソフトを使い、100m走の場面の言葉図鑑を作った。図鑑には「びゅんびゅん走る」

「はをくいしばる」「よそみする」「うでをふる」などの言葉が書かれていた。オノマトペを用いた表現、人物の様子



人物の様子描写といった表現が、この言葉図鑑によってできるようになった。

PCは、色分けも自由である。一度書いた言葉の書き直しはもちろん、言葉の場所やフォント、色やデザインといったことを試行錯誤しながら自分の思い描いた作品にしあげることができる。また、デジタル写真は拡大して見ることができ、人物の細やかな表情まで再確認でき、表現（人物描写・行動描写）することにたいへん役立った。

C児も、時間をたっぷり使ってじっくりと自分の言葉図鑑の作成に取り組んだ。言葉を選択し表現しながら、表現したいことと表現されつつあることを比較しながら考える様子が、試行錯誤している姿から感じられた。

そして、全員で、視覚的に言葉が浮かび上がるような言葉図鑑を完成することができた。

### イ スライドショーと考える力の高まり

一人一人が作成した言葉図鑑をプロジェクターを使ってスライドショーにし、投影された言葉図鑑と、グループに配付した言葉図鑑の冊子を見ながら、書きたい場面の「行動描写」「人物描写」「場面描写」を行った。

C児は、自分の作った100m走の場面について、次のように行動・人物描写の文を作った。

- ・うでをふって、びゅんびゅん走る。
- ・はをくいしばって走る。
- ・D君がよそみしながら走る。

自分が作った言葉図鑑がよく生かされ、様子を表現する言葉を意識しているのがわかる。

そして、グループのみんなが作った文を読んだり、言葉図鑑をみたりしているうちに、次のような文を作った。

- ・E君がおにの顔で走る。

この表現は、言葉図鑑にはない。言葉図鑑の中に写っているE児の表情を見ているうちに、考えついた表現である。この表現が、この後の交流で学習の流れを変えることになる。

### (2) 協同プランニングと表現について

#### ア 言葉図鑑の作成において

言葉図鑑は、PCのペイントソフトを使用して

作成した。やり方はPC1台を2～4名で使用し、「動詞」「オノマトペ」「色彩語」を書き込むというものだ。子どもたちは五味太郎氏の『言葉図鑑』に親しんでいたため、完成イメージはすでに持っていた。

同じ場面の図鑑を作りたもの同士が集まり、写真の選択から言葉の選択、その言葉の表現方法（色、場所、フォントなど）を相談しながら作成した。

C児は、初めは作業が進まず悩んでいた。そこで、教師作成の言葉図鑑を見せ、真似しながら作ることを提案した。

また、他の場面を作っている友だちの様子を見学しながら、どんな言葉表現したらいいかプランを相談した。

このように、C児は、教師との相談を通して、友だちの作品をみながら自分のイメージを膨らませ、取りかかるとあっという間に作品に仕上げた。

#### イ スライドショーをもとにした文作り（グループ活動）の場面において

C児は、前述したように「E君がおにの顔で走る。」という表現ができた。この表現を同じグループで活動していたF児が見逃さなかった。

T 「みんなに紹介したい文はありませんか。」  
F児 「ある！C君のおもしろい。」  
T 「紹介してくれる？」  
…F児が、C児を連れて前に出てくる。…  
F児 「E君がおにの顔で走る。」（笑顔）  
…C児は、人前に入る緊張があったと思うが、F児の紹介を快く感じていた。…  
…これを聞いた子どもたちは歓声をあげ、その表現のおもしろさを感じ入った。…

言葉図鑑の人物の様子を改めて観察した子どももいて、「確かにおにの顔みたいだね。」などと話していた。加工したデジタル写真を媒介とした学び合いができた。

C児の表現は、「比喩」である。言葉図鑑にはまったく書かれていない表現だった。この時間の子どもたちの学びの高まりは、完成した作文に表れている。C児はもちろん、E児、F児など他の子





どもの作品にも「比喩」を用いて表現した文が何例もあったのである。

### ウ 作文の中にみられる表現

このような過程で学んできた結果、以下のような文が作品の中に見られた。

- ・ガムテープでギーギーはって～
- ・G君が大きなはたをバサバサふっていました。
- ・びゅんびゅんと走ったので～
- ・とことこびよんびよんと走りました。
- ・ゴロゴロところがっていく大玉は～
- ・H君が顔をしかめながら走っていました。
- ・ちらっとよこを見ながら走っていました。
- ・はい色の雲が空にちらばっていました。
- ・次の日、空が雲でうめつくされている日、ぼくは、～
- ・雨はふりそうだし、雲も空をおおっていました。
- ・大きな黒い雲が空全体をかくしていました
- ・運動会の空はい色の雲にかこまれていました。
- ・おうえん団が～しながらおうえんしています。
- ・E君がおにの顔で走っていました。

音を表現したり人物の表情をとらえたりと「行動描写」や「人物描写」の文をつかって作文を書いている。また、空の様子を中心に「場面の描写」もできた。全ての子どもがいずれかの表現を作品の中に残している。

これらは、ペイントソフトを利用した言葉図鑑作りから、スライドショーを見ながらのフリートーク、スライドショーと言葉図鑑をもとにした文作りといった過程に学んだことが生かされている。デジタル機器を媒介として、国語科としてのねらいを達成することができた。

## 6 成果と課題

### (1) 成果

#### <仮説1について>

・情報活用能力を言葉の力と定義し「情意的側面」「認知的側面」「技術的側面」からとらえたことで、「信用性・真実性などの価値判断を自分の言葉をとおして行う（認知的側面）」などの情報活用能力を育てることができた。検索スピードは落ちたが考えながら調べることができ、この学習経験が今後のPC活用にいきてくると考えている。

・「調べたいテーマ」や「何を表現したいか」を明らかにしてからインターネットを活用させたことで、じっくりと言葉で考えて情報を検索し、価値判断をしながら選択、活用する学び方を身につけさせることができた。

・写真に文字を書き込み「言葉図鑑」を作る活動は作文学習の手立てとしてよい結果が得られた。デジタルカメラの画像は、PCを通して試行錯誤しながら考えた通りに加工できる魅力がある。特に、工夫した文字を加えたり切り抜いたりすることができるところが便利である。作文の学習にたいへん役立つといえる。

・どんなにデジタル機器が便利になっても、他者とのかかわりが重要であることを感じた。作文を書くときでさえ、「言葉図鑑」を介して感じたことを話し合いながら文に仕上げていくことが効果的であった。

#### <仮説2について>

・視聴覚機器に没頭するあまり一人閉じこもった学習にならぬよう他者とのかかわりを意図的にもたせたことで、「共に考える」関係ができ学習の高まりがみられた。

・言葉図鑑の作成においては、一人で考えるより2人で考えた方が試行錯誤しやすいことがわかった。

### (2) 課題

#### <仮説1について>

・情報活用能力における言語能力を「情意的側面」「認知的側面」「技術的側面」からとらえる試みをしてみたが、各学年の系統性についての研究が足りなかった。今回は第6学年の「読むこと」、第3学年の「書くこと」の試案をつくって実践してみたが、学習指導要領とのかかわりも含めて今後も追究していきたい。

・仮説1は個人の学習に視点を置いているが、学びは他者とのかかわりが不可欠である。「視聴覚機器を媒介とした他者とのかかわり」という視点が課題である。国語科としては、それをどのような言語活動としてとらえていけばよいのか考えていかななくてはならない。

#### <仮説2について>

・視聴覚機器を使用する際の「他者とのかかわり」のあり方が課題として残った。写真をスライドショーしながらフリートークしたが、日常会話での話し合いでは文章に生きてこないと感じた。また、PCにおいては、1台に2人が限度であった。2人であっても、PCを操作している子どもは思考が深まるが、それをサポートする子どもはなかなか深まらないと感じられた。